

「最新の調査成果から探る古津八幡山遺跡」

会期 9月13日(土) ▶ 令和8年3月8日(日)

はじめに

古津八幡山遺跡は、昭和62(1987)年に磐越自動車道の土取り工事に伴う事前の試掘調査によって発見されました。これまでに25回の発掘調査が行われ、弥生時代後期・終末期(約2000年～1750年前)の大規模な高地性環濠集落や、県内最大の古墳(約1600年前)などが確認されています。弥生時代・古墳時代の社会情勢や、北陸から東北における地域間関係などを考えるうえで核となる重要な遺跡であることから、平成17(2005)年に国の史跡に指定されました。



古津八幡山遺跡 空撮写真(南東から)

平成29(2017)年から令和4(2022)年にかけて、遺跡北東部の史跡指定地外において遺跡の広がりを調べるための調査を実施したところ、弥生時代の重要な遺構が新たに相次いで発見されました。そして、令和7年3月にその発掘調査成果を記載した発掘調査報告書を刊行しました。

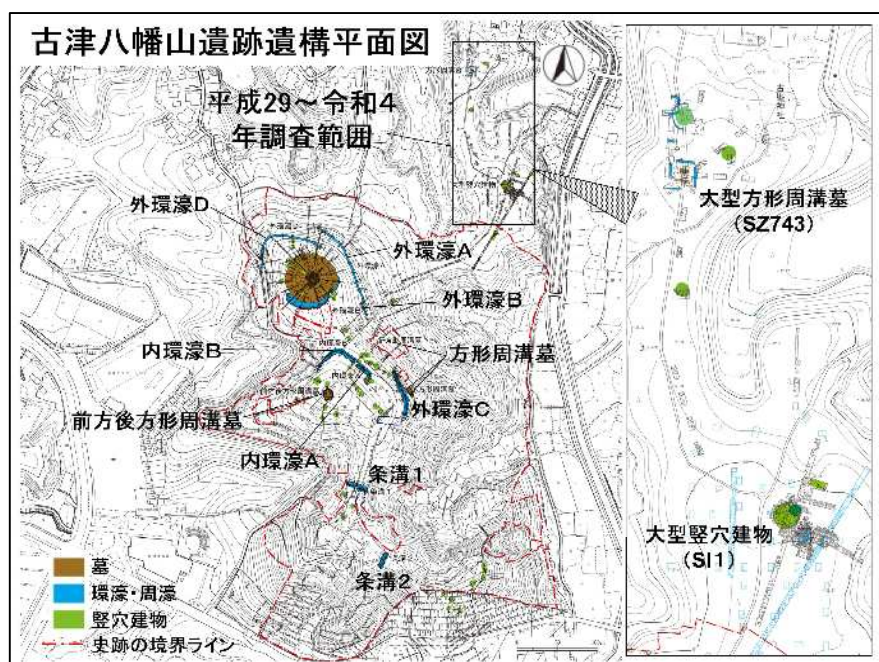
今回の企画展は、国史跡の指定から20周年と、発掘調査報告書の刊行を記念して開催するもので、最新の調査成果から古津八幡山遺跡の実像について探ります。

古津八幡山遺跡と最近の調査成果の概要

古津八幡山遺跡では、これまでの発掘調査で弥生時代の環濠や条溝、竪穴建物65棟、方形周溝墓5基、前方後方形周溝墓1基などが確認されています。また、出土品では土器や石器のほかに、鉄器やガラス玉などが出土しています。

標高約50mの丘陵という立地や、幅約2m・深さ約2mの断面がV字形をした濠(環濠・条溝)が集落を囲む点などから、中国の歴史書『魏志倭人伝』に書かれた「倭国乱」に関連する戦いに備えた防御的な集落と考えられています。

さて、平成29年から令和4年にかけて遺跡北東地区の標高約20～25mの丘陵中腹域の尾根で実施した遺跡の広がりを把握するための発掘調査では、遺跡で最大となる大型の竪穴建物(SI1)や、遺跡で最大となる方形周溝墓で、木槨構造の埋葬施設を含む計4基の埋葬施設が確認された大型の方形周溝墓(SZ743)が発見されるなど、重要な発見が相次ぎました。これらの発見により、丘陵の頂上部だけではなく中腹域も、弥生時代に居住域や墓域として利用されていたことが判明しました。



古津八幡山遺跡遺構平面図

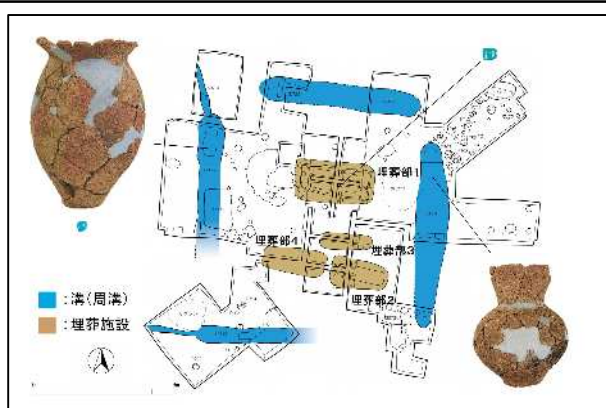
近年の調査で見つかった方形周溝墓

北東地区では近年の調査によって方形周溝墓が新たに2基見つかりました(SZ743・SZ822)。方形周溝墓 SZ743 は周溝の四隅が途切れる形態で、周溝の内側で計測すると、長軸(南北)9.6m、短軸(東西)8.4mと古津八幡山遺跡で最大の方形周溝墓となります。

内部には4つの埋葬施設があり、そのうちの中心の場所に位置し、最大の埋葬施設である埋葬部1は、東日本では基本的に認められない「木槨」構造の埋葬施設と考えられます。

出土遺物は、周溝から壺や甕、破損したガラス玉1点などが、また埋葬部1からは高杯や完形のガラス玉1点、石鏃2点などが出土しました。出土遺物から、弥生時代後期後半(2期)を中心とする時期のお墓と推測されます。

また、方形周溝墓 SZ743 から尾根筋に北西約 20mの場所では方形周溝墓 SZ822 が存在します。周溝の内側で南北約5mの規模です。周溝は、西側については不明ですが、南東隅と北東隅のコーナーは途切れない形態です。これらの発見により、調査地周辺が墓域としても利用されていたことが判明しました。



方形周溝墓 (SZ743) 平面図



国内の木槨墓の分布

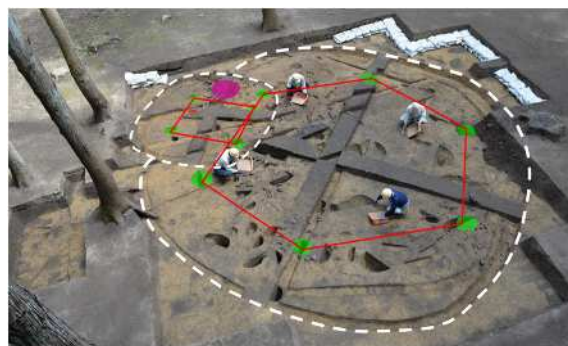
近年の調査で見つかった竪穴建物

北東地区では近年の調査によって弥生時代の竪穴建物が新たに6棟確認されました(SI1・401・465・728・802・821)。出土土器から、SI401・728・802・821 の4棟は弥生時代後期後半(2期頃)、SI1 と SI465 は弥生時代終末期(4期頃)と推測されます。

これまでの調査で確認されている竪穴建物の分布や数からは、弥生時代後期後半の集落の中心は環濠に囲まれた丘陵頂上部にあったと考えられますが、丘陵中腹域の北東地区においても竪穴建物が点在することが分かり、北東地区が居住域としても利用されていたことが判明しました。

また、弥生時代終末期(4期)になると、北東地区の南側で遺跡の中で最大となる大型の竪穴建物(SI1)や、別の竪穴建物(SI465)がつくられるなど、調査地周辺域の利用が活発になったと考えられます。

なお、竪穴建物 SI728 では、土器のほかに鉄鏃が出土しており、大型竪穴建物 SI1でもヤリガンナや砥石、さらにはガラス玉などが出土しています。これ



竪穴建物 (SI1・SI465) 全景 (北西から)



竪穴建物と方形周溝墓 (SI821・SZ822 北西から)

ら鉄製品やガラス玉の出土などからは、北東地区において有力者層の存在したことが示唆されます。

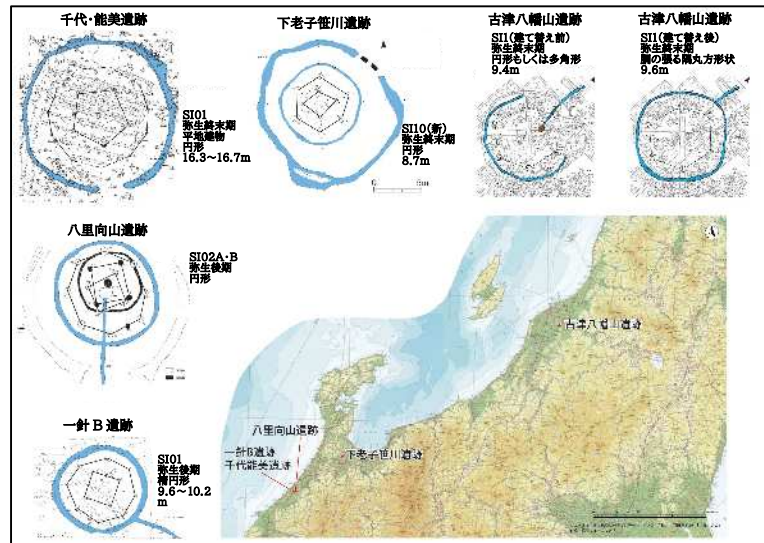


平成 29 (2017) ～令和 4 (2022) 年発掘調査場所 (北東地区) 遺構平面図

大型竪穴建物(SI1)

大型の竪穴建物(SI1)は一度建て替えが行われていました。建て替え前は円形もしくは多角形で、建て替え後はやや胴の張る隅丸方形形状の平面形をなし、一辺 9.6mと古津八幡山遺跡で最大の建物になります。建て替え前も後も、上屋を支える柱は一般的な竪穴建物の4本よりも多い6本でした。炉や貯蔵穴は確認されず、居住以外の用途で使用された特殊な建物である可能性が考えられます。

また、これまでの古津八幡山遺跡の竪穴建物では確認されていなかった中央部付近の土坑(中央土坑)や、建物外へと延びる溝(排水溝)を伴うことも分かりました。中央土坑や排水溝などを伴う点は在地の竪穴建物の中では異質で、西方の拠点集落や有力者との関連が推測されます。



北陸における弥生時代後期・終末期の主な多柱構造の大型建物

出土遺物は、土器のほかにヤリガンナや砥石、ガラス玉などが出土しました。出土遺物から、弥生時代終末期(3世紀前半頃)の建物と判断されます。なお、出土土器の大半は北陸系土器で、弥生時代後期後半(2世紀頃)に多く見られた東北系土器はごく少量でした。このことは、3世紀前後を境に古津八幡山遺跡におけるそれまでの地域間関係に大きな変化の生じたことがうかがえます。

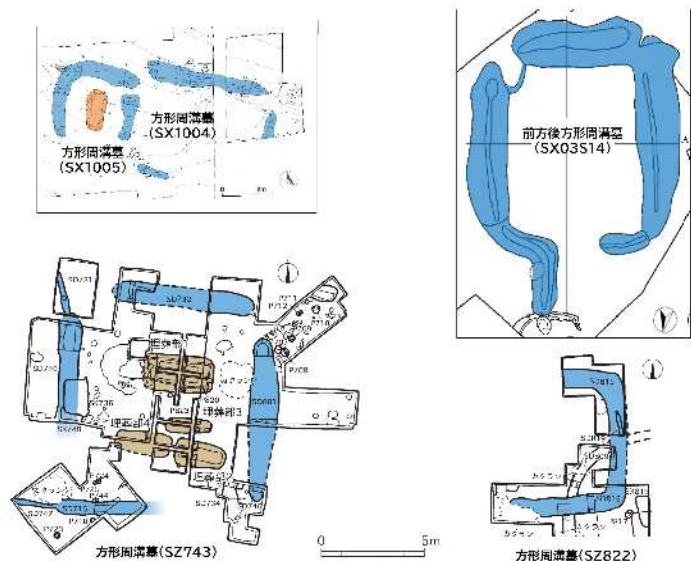
古津八幡山遺跡における弥生時代のお墓

古津八幡山遺跡では、丘陵頂上部の調査において方形周溝墓3基(SX1005(方形周溝墓1)・SX1004(方形周溝墓2)・SX1303(方形周溝墓3))と、前方後方形周溝墓1基(SX03S14)、土器棺墓1基(SX1006)が見つかりました。

さらに、近年の発掘調査で新たに方形周溝墓が2基(SZ743・SZ822)見つかり、遺跡北東地区の丘陵中腹域も墓域として利用されていたことが分かりました。

方形周溝墓の年代については、出土土器などから SX1005 が後期前半(1期)、SX1004 が後期後半(2期)、SZ743 が後期後半・後期末(2・3期)頃、前方後方形周溝墓(SX03S14)が終末期以降(4期以降)と推定され、時期が新しくなるにつれてお墓の規模が大きくなっていく傾向にあります。

なお、比較的墳丘の規模が小さく、墓壇や木棺サイズもそれほど大きくない方形周溝墓 SX1005 において、当時の希少品である鹿角装鉄剣が副葬されていたことは、方形周溝墓に埋葬された人物が集落の上位有力者であったことを物語っています。



古津八幡山遺跡の弥生時代の墳墓

方形周溝墓(SX1005)の埋葬施設

方形周溝墓1(SX1005)の溝は3辺で確認されており、北辺の溝は方形周溝墓2(SX1004)の溝と共用しています。谷側の東辺の溝は確認されませんでした。規模は周溝の内側で、長軸 3.1m、短軸 2.8mです。

お墓の中央部では埋葬施設が検出されています。埋葬施設をつくる際の坑(墓壇)は長方形で、規模は上幅で長軸 2.1m、短軸 1.1mの大きさです。棺は残っていませんでしたが、墓壇底面の両端で確認された溝状の掘り込みから、埋葬施設は組合せ式木棺で、木棺の大きさは、長軸約 1.6m、短軸約 0.5mと推定されています。

棺の底面近くからは、鹿の角を柄とした長さ 22 cm・幅 2.5 cmの鉄剣(鹿角装鉄剣)と、石鏃1点が出土しました。また、鉄剣には繊維状の付着が見られることから、織物に包まれた状態で置かれていた可能性があります。

周溝からの出土量は方形周溝墓2に比べて少ないですが、東北系(天王山式系)土器が主体的に出土しています。

方形周溝墓2は長軸 6.3m、短軸 4.7mと、方形周溝墓1に比べて大きいお墓でしたが、埋葬施設は確認できませんでした。



方形周溝墓 (SX1005 左) と鹿角装鉄剣 (右)

方形周溝墓(SZ743)の埋葬施設

方形周溝墓(SZ743)は内部に埋葬施設が4つ存在しました。そのうちの埋葬部1は木槨構造の埋葬施設と考えられ、位置や規模、構造から4つの埋葬施設の中で最も上位で中心的な埋葬施設と考えられます。

方形周溝墓 SZ743 の埋葬施設と、方形周溝墓 SX1005 の埋葬施設について、墓壇(木棺を入れるために掘った坑)と棺の大きさをそれぞれ比較すると、方形周溝墓 SZ743 の埋葬部1や埋葬部2のほうが、SX1005 よりも墓壇、棺ともひとまわり大きいことが分かります。

古津八幡山遺跡で確認されている弥生時代のお墓と埋葬施設一覧

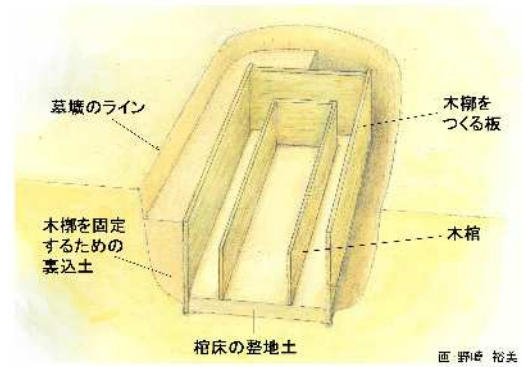
遺構名	標高 (m)	墳丘規模 (m)		周溝 (m)		埋葬施設 の名称	墓壇の大きさ (m)		棺の大きさ (m)		時期 (新潟 シンボ 編年)
		※周溝内端 長軸	短軸	幅	深さ		長軸	短軸	※板材外端 長軸	短軸	
方形周溝墓 SZ743	23.0	10.0	8.8	0.6~ 1.4	1.1	埋葬部1 (SK739)	3.4	1.8	1.9	0.8	2期前後
						埋葬部2 (SK741)	2.5	1.4	2.2	0.6	
						埋葬部3 (SK742)	2.2	0.7	—	—	
						埋葬部4 (SK810)	2.8	1.2	—	—	
方形周溝墓 SZ822	22.6	5.5	—	0.9	0.4	—	—	—	—	—	—
方形周溝墓1 SX1005	45.0 ~ 46.5	3.1	2.8	0.5~ 0.8	0.2 ~ 0.4	主体部	2.1	1.1	1.6	0.5	1期
	45.0 ~ 46.5										
方形周溝墓2 SX1004	45.0 ~ 46.5	6.3	4.7	1.0	0.5	—	—	—	—	—	2期
	42.2 ~ 42.5										
方形周溝墓3 SX1303	42.2 ~ 42.5	3.0	1.5 以上	0.9	0.3	SX1304	2.3	1.0	—	—	?
前方後方形周 溝墓 SX03S14	54.2 ~ 54.7	13.0	7.5	0.9~ 2.6	0.2 ~ 1.1	—	—	—	—	—	5or6期
	54.2 ~ 54.7										

方形周溝墓(SZ743)埋葬部1のつくり方

発掘調査の結果から、方形周溝墓(SZ743)埋葬部1の木槨は、外寸で長軸 3.0m・短軸 1.2m、木棺は外寸で長軸 1.9m・短軸約 0.8mと推定されます。しかし、木槨・木棺とも後世の削平によって高さは不明です。

埋葬部1のつくり方は以下の1～4のような工程・工法と推定しています。

- 1 棺を入れるための穴(墓壇)を掘ります。平面形は長方形に広めに掘ります。
- 2 墓壇内に板で長方形の空間(木槨)をつくります。長側板に小口板を挟みこむ構造で、墓壇と木槨との間には裏込土を入れて木槨を固定します。底板は用いず、木槨内下部に土を平らに敷いて整地し、棺を置くための床(棺床)をつくります。
- 3 木槨内に木棺をつくります。木棺も底板を用いなかったと考えられ、現地で組み立てたと推測されます。
- 4 木棺、木槨に蓋をし、土で覆って墳丘を完成させます。



方形周溝墓 (S743) 埋葬部 1
イメージイラスト

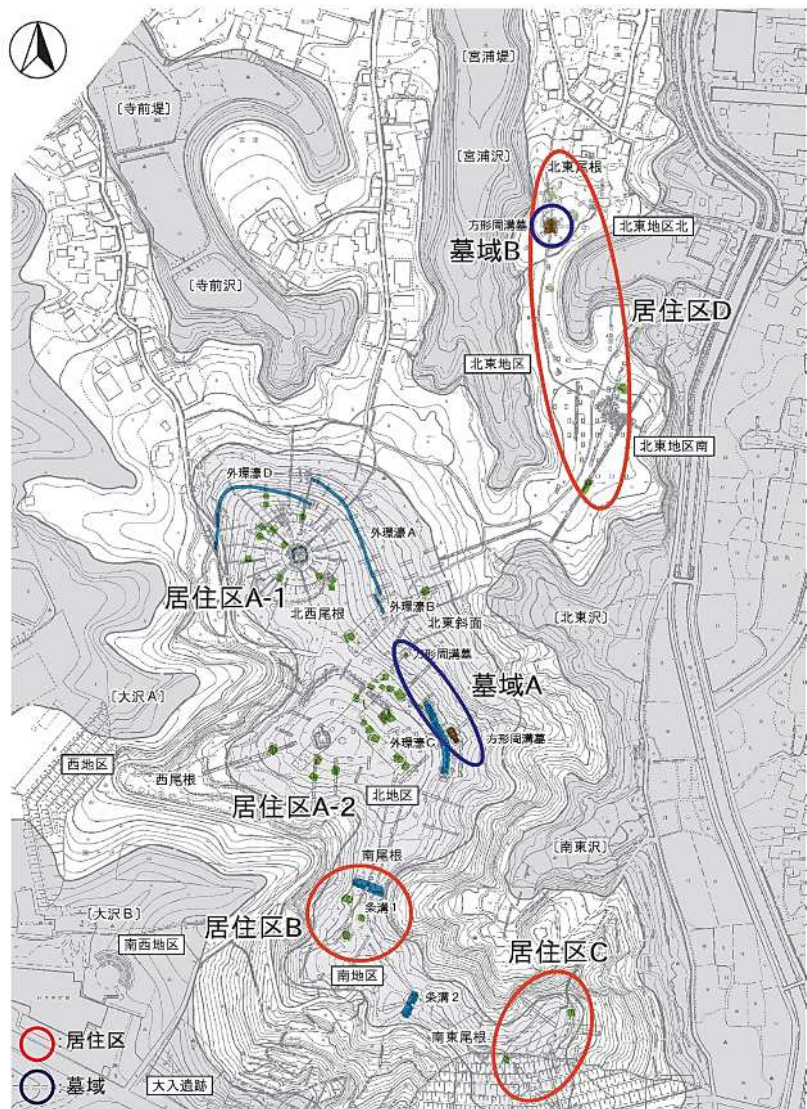
古津八幡山遺跡の空間利用 (弥生時代後期前半・後半)

古津八幡山遺跡で最も古い弥生土器は弥生時代中期末で、この時期に集落が始まっている可能性もありますが、本格的な開発は後期前半(1期古)以降とみられ、後期前半(1期)のうちに外環濠の掘削が行われています。

遺跡全体を見ると、後期前半から後半(1期・2期)にかけて、外環濠の内部を中心に竪穴建物が多くつくられていることから、この時期は丘陵頂上部の北地区が集落の中心域であったと考えられます(居住区 A-1・A-2)。条溝1や条溝2の外側においても竪穴建物が確認されていますが、どちらも少ない数にとどまります(居住区 B・C)。

近年調査を行った北東地区では、弥生時代後期後半(2期)には竪穴建物が点在し、居住域として利用されていたことが判明しました(居住区 D)。さらに、北東地区の北では大型の方形周溝墓(SZ743)が後期後半(2期)に築造されており(墓域 B)、この時期は居住域と墓域とが混在していた状況が推測されます。

北東地区では竪穴建物 SI728 で希少な鉄鏃が出土しており、また遺跡で最大となる方形周溝墓 SZ743 が築造されるなど、有力者の存在や関与が示唆されます。



弥生時代後期後半 (1・2期) の古津八幡山遺跡遺構平面図

古津八幡山遺跡の空間利用（弥生時代後期末・終末期）

弥生時代終末期（4期）前後、外環濠や条溝はほぼ埋没したと考えられますが、遺跡最高所付近の平面形が方形状の内環濠A・Bは、この時期に掘削されたと推測されます。

竪穴建物は、頂上部の北地区で減少する一方、南東尾根や北東地区南側でまとまって確認できます（居住区 C・D）。北東地区北側では竪穴建物は見られなくなりますが、引き続き墓域として利用されています（墓域 B）。また、北地区では前方後方形という新たな形式のお墓が遺跡最高所において築かれます（墓域 C）。この時期に居住域と墓域とが意識的に区分けされた可能性があります。

このように、この時期は居住域や墓域の分布が大きく変化しています。また、東北系土器や折衷系土器の比率が急減しており、さらに、大型の竪穴建物（SI1）や前方後方形周溝墓が出現するなど、古津八幡山遺跡を取り巻く内外の状況が大きく変化していたことが推察されます。

なお、北東地区は方形周溝墓（SZ743）や大型の竪穴建物（SI1）など、西方との関連がうかがえる遺構や遺物が比較的多く見られ、北地区など丘陵頂上部にいた集団とは別系統の集団が暮らしていた可能性も考えられます。

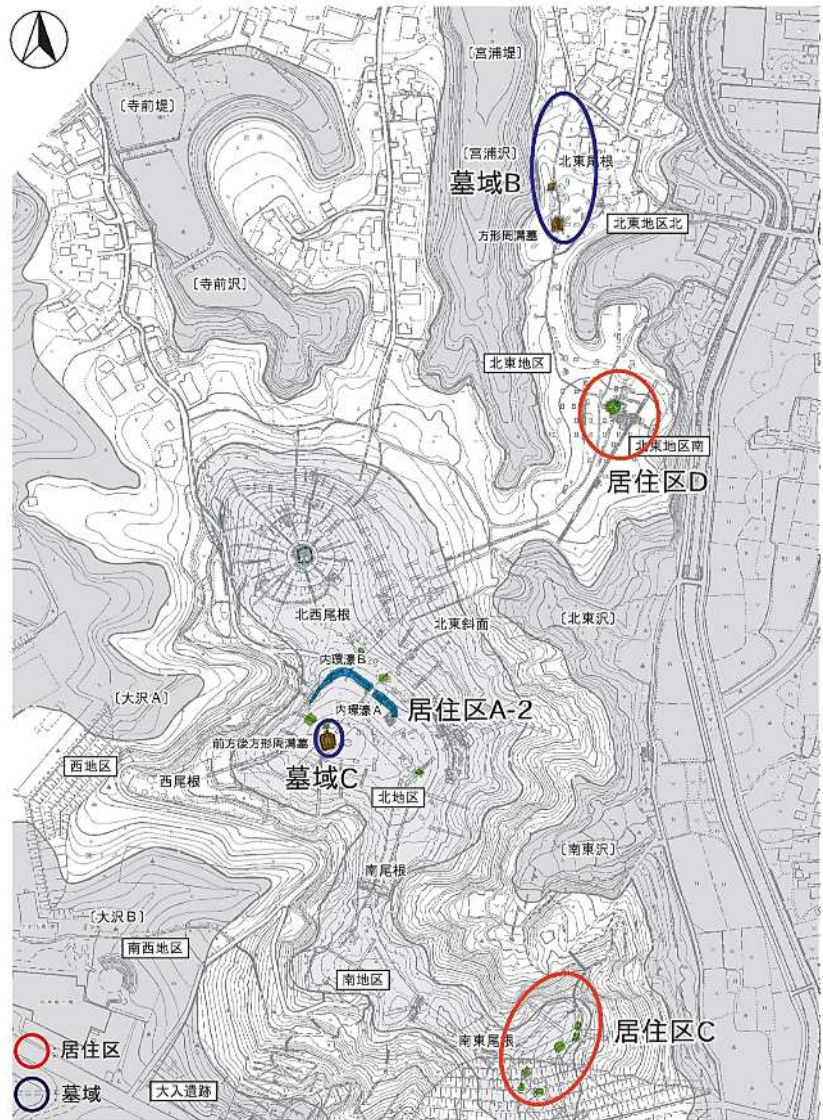
おわりに

近年の調査により、遺跡北東部の丘陵中腹域に位置する尾根が、弥生時代後期後半以降、居住域や墓域として利用されていた実態が明らかになりました。

方形周溝墓（SZ743）は、県内初となる確実な弥生時代の複数埋葬事例で、中心埋葬施設に木槨構造を採用するなど、東日本では特異なお墓といえ、西日本の墓制の影響を強く受けていると考えられます。さらに、南東約 150m に位置する弥生時代終末期の大型竪穴建物（SI1）も、主柱6本の多柱構造や、排水溝の存在など、西の拠点集落との関連が推測されます。

なお、それらの分布からは、首長間のネットワークを介して飛び石的に、ピンポイントで古津八幡山遺跡にもたらされたことがうかがえます。

また、出土土器では弥生時代終末期（4期）になると東北系土器が急減する状況が明らかとなり、その



弥生時代後期後半（3～6期）の古津八幡山遺跡遺構平面図

時期に地域間の関係が大きく変化したことが推察されます。

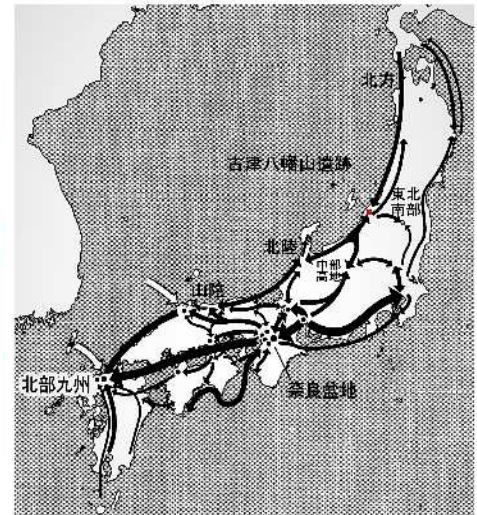
弥生時代から古墳時代への移行期にあたる3世紀前半は、激動の時代を象徴するかのように列島各地で人やモノの動きが活発化する時期ですが、古津八幡山遺跡の動向も当時の社会の変化を反映していると考えられます。

古津八幡山遺跡の主な遺構の時期と動向

※赤字は平成29年～令和4年の調査で見つかった遺構

時代	北陸西部編年	古墳集成編年	新潟シンボジウム編年	古津八幡山遺跡			
弥生時代中期	小松 寺光寺 戸水田			環濠	竪穴建物	掘立柱建物	墓
弥生時代後期	1群 V-1群 V-2群 V-3群	環濠式	1期	集落の出現 外環濠の掘削	SI03S20 SI0804 SI802・SI821 SI0603 SI03S03 SI0602 SI1307 SI728		方形周溝墓 SX1005 SZ743 (大型方形周溝墓) SX1006 SX1004
弥生時代終末期	2群 2-1群 2-2群	法仏式	2期	環濠の一部埋没 ⇒一部環濠の再掘削	SI03S06 SI03N03 SD03S16・SD1011		SZ822?
古墳時代前期	3群 4群 5群 6群 7群 8群 9群 10群	月影式 白江式 古府カルビ式 高直式	3期 4期 5期 6期 7期 8期 9期 10期	高地性集落の廃絶、平地での集落の出現			前方後方形周溝墓?

↑古津八幡山古墳
(古墳中期)



3世紀前半の人の動き (松木武彦 2007『列島創世紀』小学館より・一部改変)

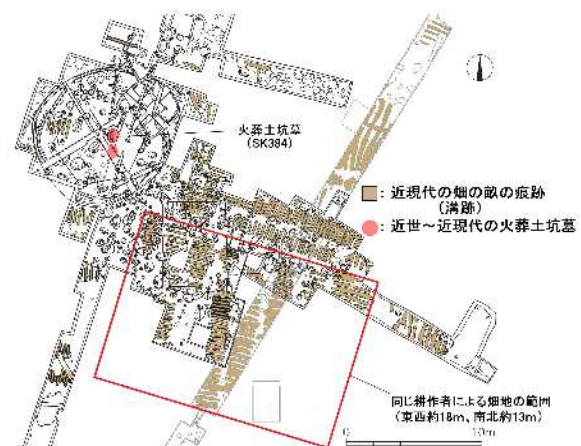
コラム 近世以降の土地利用

近年の北東地区の発掘調査では、近世以降の遺構や土地利用による痕跡についても確認することができました。

大型竪穴建物(SI1)内の土坑SK384からは、古銭6枚と炭化した木製の数珠玉2点、多量の骨片や炭化物が出土しました。放射性炭素年代測定の結果、江戸末期～明治時代の火葬墓と考えられます。周辺では、他にも近世以降の土坑墓とみられる穴が複数見つかり、調査地周辺が近世以降に墓地として利用されていたことが明らかになりました。

また、遺跡のある丘陵一帯は太平洋戦争前後に畑地として利用されており、これまでの調査でも畑の痕跡や畑地の造成に伴う切り土や盛り土が確認・報告されています。近年調査を行った北東地区でも、畑の畝の痕跡が溝として多数検出されました。

なお、溝の方向は当時の地形に沿っていると考えられ、溝の方向の違いから畑地と畑地との境界や、ひとつの畑地の範囲を推測することができます。下の図には直行する2方向の畑の溝が存在します。赤枠は東西約18m、南北約13mの範囲で、同じ耕作者によるひとつの畑地の範囲であったと推定されます。



近世以降の主な土坑墓と畑の畝の痕跡 (着色部分)

※近世以降の土坑墓は方形周溝墓SZ743周辺でも確認されています

講演会
申し込み不要

11/22 午後1時半～午後3時
「これまでの調査成果から探る
古津八幡山遺跡」

講師 相田 泰臣 (新潟市文化財センター学芸員)
会場は新潟市文化財センター1階研修室

展示解説
申し込み不要

11/29 午後2時～30分程度
会場は史跡古津八幡山 弥生の丘展示館